

# Best Solution

バイオ医薬品による  
臨床・研究・教育・経営を  
サポートする

SANDOZ

## Past and Future

### 内分泌代謝科は 子どもの"総合内科"

地方独立行政法人神奈川県立病院機構  
神奈川県立こども医療センター  
内分泌代謝科 部長  
室谷 浩二氏

## (R)Evolution

### 医薬品・薬物療法を軸に 地域連携を広げていく

日本赤十字社 大阪赤十字病院  
薬剤部 薬剤部長  
小林 政彦氏

## Column

### バイオシミラー普及への思いは 医療機関も保険薬局も同様

## 特集

# 地域の中核病院が守るべき 小児専門医療のカタチ

日本赤十字社 諏訪赤十字病院  
小児科 部長  
松浦 宏樹氏

独立行政法人地域医療機能推進機構 (JCHO) 大阪病院  
小児科 診療部長  
柏木 博子氏

Vol.  
2023

10

# Past and Future

リーダー・インタビュー  
「日本医療の past and future」

小児内分泌代謝領域の医師として診療にあたるほか、臨床研究にも積極的に取り組む姿を紹介するインタビュー。大学や研究所と共同で患者の遺伝学的解析を実施し研究成果をあげるほか、医局スタッフの自主性を伸ばす方針をとる室谷浩二氏に、その取り組みを語っていただく。



## 室谷 浩二 氏

地方独立行政法人 神奈川県立病院機構  
神奈川県立こども医療センター  
内分泌代謝科 部長

## 内分泌代謝科は子どもの“総合内科”

### 医学部受験本を読んで 医師への道を歩み始める

——室谷浩二先生は、横浜のご出身で、今も横浜の病院に勤務されています。地元で医療で貢献しようというお考えからでしょうか。

室谷浩二氏（以下、室谷）——幼稚園の頃は体調を崩すことが多く、よく小児科を受診していました。父は会社員、母は主婦で親戚にも医師はいなかったので、医師という職業を意識するようになったのは、この頃に診ていただいた小児科の先生の影響かもしれません。

小学校以降、病気をしなくなりました。中学受験に失敗し、地元の公立中学に進みました。中学3年生の時、通学路にある書店で医学部入学の戦略本を見て、「卒業生がたくさん医学部に進学している高校に入れば、自分も医学部に行ける」とわかり、医学部進学を意識するようになりました。

当時、公立中学からは地元の公立高校に進学するのが当たり前でしたが、そ

の本に掲載されていた東京・神奈川の私立高校の資料や願書約20校分を取り寄せて志望校を絞り込んだうえで、対策しながら勉強しました。

幸い、慶應義塾高校に進学が決まりましたが、医学部に進めるのは学年で上位3.5%の成績優秀者に限られます。1、2年生の頃の成績では医学部への推薦による内部進学が難しいと言われ続けたので、英語と数学を猛勉強しました。その結果、実力テストの結果で逆転し、運よく内部進学が叶い、慶應義塾大学医学部に進学できたのです。

大学では授業への出席をほとんど取られなかったのですが、硬式テニス部に入り運動三昧の生活をしていました。5年生の時は日中医学学生交流協会にも所属し、第3次派遣団として、6週間中国を回って現地の医学生と交流をしたり病院や研究所を見学したりしました。6年生の夏は米国で開業していた先輩を訪ねてクリニックや病院での診療や手術を見学し、半分観光もして6週間米国に滞在しました。

米国滞在中に各地で他大学の医学部

生に会って話す機会があり、「慶大生は6年生の夏になってもこんなことをしているのか」と言われていましたが、私たちは卒業試験がないため、夏休み明けの9月から必死に頑張るのです。数人のグループで勉強し、お互いに教え合い助け合って国試合格を目指すので、他大学に比べて国家試験の合格率が高いのだと思います。

### 内分泌領域に進み 遺伝子研究に取り組む

——小児科を専攻されたのは、子ども時代に診ていただいた先生の影響ですか。

室谷——よく硬式テニス部の練習を見に来てくれていたOBの長谷川行洋先生と知り合ったことが非常に大きかったです。当時は慶應義塾大学病院の小児科にいらして、明治神宮のテニスコートに来ては練習相手になってくれたりごちそうしてくれたので、「この人についていこう」と思いました。

何より子ども好きであることが、小児

神奈川県立こども医療センターの外観。1970年設立と小児のための総合病院の中では老舗と言える



科を選んだ理由です。治療した子どもがその後何十年も生きていてくれることを想像すると、子どもと関わる仕事がしたいと思うようになっていました。

卒業後すぐに大学病院の小児科の医局に入局して、大学病院と地方の大学関連病院で2年間研修、その後2年間は群馬県の総合太田病院（現、SUBARU健康保険組合太田記念病院）で診療していました。

医師5年目になる時に小児科のどのグループに入るか、教授に聞かれました。その時「入りたいところを3つ、入りたくないところを1つあげて」と聞かれ、「入りたくないわけではないですが、新生児はすでに十分研修しました。入りたいグループは内分泌、腎臓、免疫です」と答えました。すると、大学病院の隣にある東京電力病院にいらした「緒方勤先生のもとで内分泌の研究をやるように」と決まりました。

この病院は一般患者の診療を行っていないので時間に余裕があるうえ、地下に広い実験室があり、医学部の図書館にもすぐ行けるという研究にはうってつけの環境でした。そこで緒方先生とマンツーマンで8年間研究をしました。

患者さんのDNAを用いた遺伝学的解析を行い、病気の原因となる遺伝子を限局化したり、遺伝子変異を同定したりしていました。これをもとに学位を取得できましたし、後輩が学位を取る手伝いなどをしながら過ごしました。

家族の病気でドイツ留学を断念し、東京歯科大学市川総合病院に移ることになりました。こちらは一般小児科の患者数が多いうえに東京歯科大学の歯学部生向けに小児科の授業も担当していたのでなかなかの忙しさでした。

そのような日常を送っていたときに、実家から車で20分の距離にある神奈川県立こども医療センターの公募情報を長谷川奉延先生に教えていただきました。応募して運よく医長で採用され、今に至っています。

#### 小児専門病院に移り 若手の自主性を伸ばす

——こちらに移られてからは、これまでと違って研究や教育より臨床中心の生活に変わったのではないのでしょうか。

室谷——診療は大変ですが、多くの貴重な患者さんがおり、これら患者さんの臨床症状や遺伝学的解析をまとめることで有益な臨床研究をおこなうことが可能です。しかし、病院内には研究を行うための人手が足りません。

そこで、大学や研究所に貴重な患者さんのDNAを1000人以上送り、遺伝学的解析を行っていただきました。それらの結果をまとめて論文を書き、多くの医師や研究者が学位を取得できました。

昭和の時代は、研究倫理も整っておらず、十分な説明のないまま患者さんの検

体を得ることが可能でした。一方で、その検体が自分たちの施設から外に出ることが少なく、結局、貴重な患者さんの検体が活かされないことも多くありました。しかし今は状況が変わりました。遺伝学的解析の技術も飛躍的に進歩し、共同研究も盛んに行われるようになっていきます。

私は運にも縁にも時代にも恵まれ、「ついでな」と思わざるを得ませんね。

——若手スタッフの育成などでどのような方針を取られていますか。

室谷——私が研修医の時代、慶應の関連病院では、初めての処置（例えば膿胸の患者に対する胸腔穿刺）でも何でもやらせてくれました。それを見守ってくださる先輩方に憧れ、自分も見習っています。

センターにいる医師は後期研修以降の医師ですが、初期臨床研修の2年でどんなことを経験してきたかによって、知識や技術などには開きがあります。また、今何をすべきかを自分で考えられる人とそうでない人もいます。全体のレベルを上げるためには、それぞれに任せて、考えたり、練習してもらい機会を増やすことが有効ではないでしょうか。

もう一つは、特に内分泌領域は成長や発達に関わりますから、総合内科のようなポジションになります。専門領域の決まっていない後期研修医には研修で他科を回るときもしっかり学び取ってくださるようにアドバイスします。

この PDF は、Best Solution Vol.10 から、著作権者の許諾を得て抜粋編集しています。  
本冊子を希望の方は、サンド（株）の担当者に連絡ください。

[Best Solution] Vol.10  
発行／サンド株式会社  
編集・制作／日経メディカル開発

DMN2312S-NK  
2023 年 12 月作成